

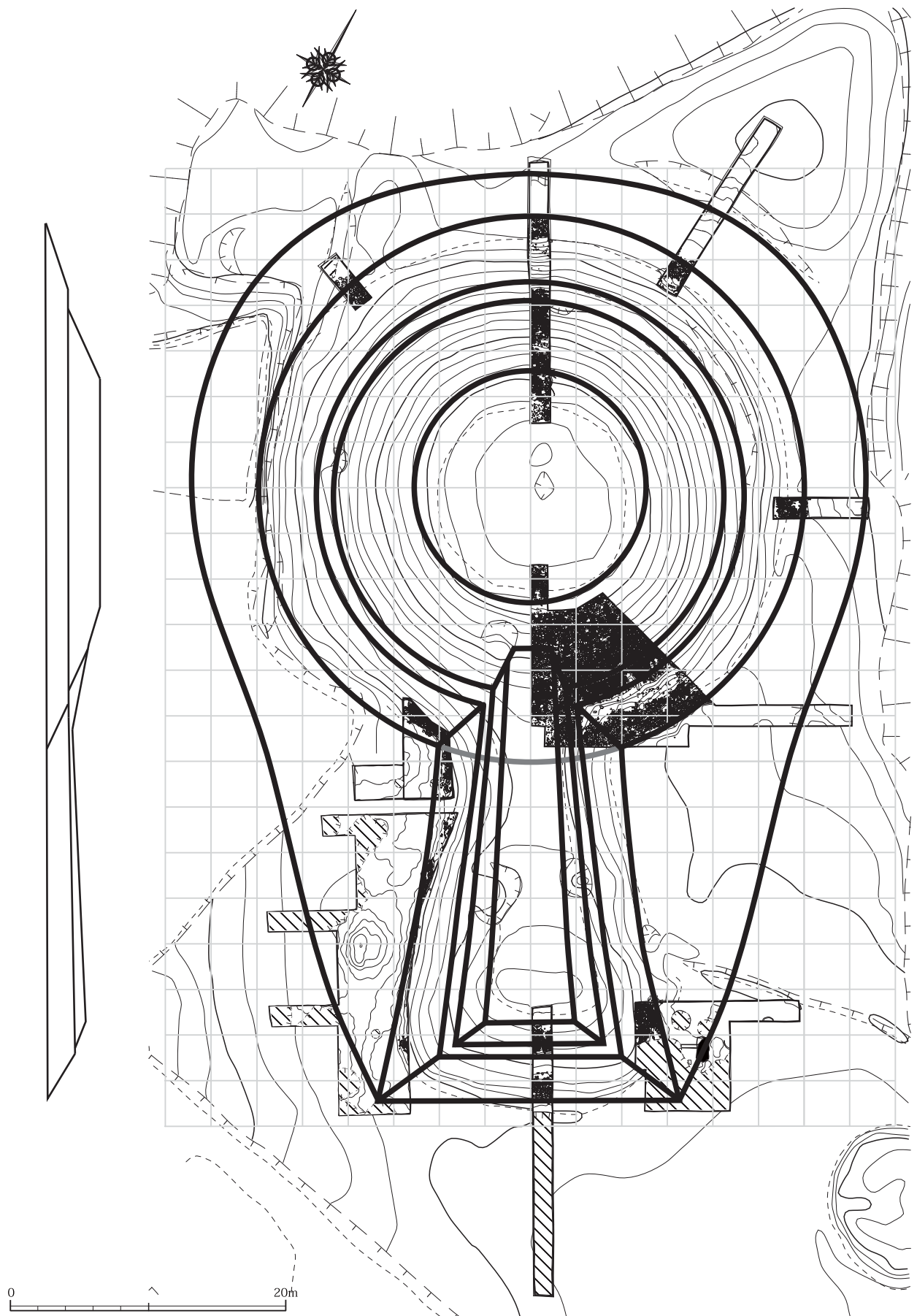
### 第三章 総括

#### 第1節 生目14号墳の墳丘形態について

調査の結果、後円部、前方部ともに2段築成であることが明らかになっている。前方部側面の段築の状況など、情報が不足している部分もあるが、これら発掘調査成果を踏まえて、墳丘企画の復元を行ったのが第31図である。復元に関しては、沼澤豊の24等分値企画法（沼澤2005）を参考にした。14hトレンチでは、後円部基底石が復元後円部基底円周の内側に入っているが、これは地形的制約などの要因により生じたもので、本来は正円で企画されたと考え、その他各トレンチの調査状況に合わせて円を描いた。また基底部のテラスは不明瞭な部分も多く復元していない。1段目テラス、墳頂平坦面は14aトレンチ、14dトレンチの調査状況から復元した。後円部1段目テラスから前方部1段目テラスへは、やや下降傾斜しながらスロープ状に接続し、前方部前面に向かって上昇する。前方部形状については、前方部前面に位置する14fトレンチ、前方部側面の14e、14g、14hの調査成果から復元した。前方部側面裾のラインは、14gトレンチの基底石の並びや等高線から、前方部隅角に向かって緩やかに屈曲しながら開く形状としているが、直線的に開く形状であった可能性もある。また前方部前面の基底石列が、東側よりも西側が北方向へ入り込み、前方部前面のラインが墳丘主軸に対して僅かではあるが斜交する形状となっているが、やはり本来的な企画は主軸に直交する形状であったと思われる。施工の段階で生じたものと思われる。隅角は東西ともに失われていたため、前方部側面ラインと、前方部前面ラインを延長し、両者が交わる位置に復元した。前方部の1段目テラスは側面での確認を行っていないため、前方部前面とくびれ部を結んで、強引ではあるが復元した。前方部の墳頂平坦面は、後円部墳頂平坦面へとスロープ状の斜道が伸び接続している。ただしこのスロープは後円部墳頂まで伸びず、後円部2段目斜面の途中に接続する。スロープと後円部2段目斜面との間には明確な傾斜変換点はなく、一見、中途半端な接続であるが、14号墳では前方部墳頂平坦面、スロープ上、後円部2段目斜面全てが礫で覆われているため、視覚的に違和感はない。スロープと後円部2段目斜面の境界は、スロープの両肩位置に並べられた区画列石が途切れる位置に当たるとと思われる。

墳丘基底部の標高は後円部背面で25.9m、くびれ部で26.3m、前方部前面で26.9mと前方部から後円部に向け緩やかに下降傾斜しており、後円部背面と前方部前面では1mの比高差がある。1段目テラスの標高は、2段目斜面基底部で比較すると、後円部背面で27.8m、くびれ部後円部側で27.9m、前方部前面で28.1mと僅かに前方部前面が高いものの、比高差は0.3mに減少しており、墳丘1段目において高低差が補正され水平に近づいている。墳丘斜面の平面形における比率は、後円部が下段から1：1.5、前方部が下段から2：1となっている。

14号墳の墳丘形態の特徴として、後円部径に対して前方部長が短いことが挙げられ、その比率は後円部1：前方部0.62（以下後円部を1とした際の前方部の数値のみ記載する）となる。生目古墳群の他の前方後円墳の中で、発掘調査で数値が明らかなものは、3号墳0.78、5号墳1.04、7号墳0.92、21号墳0.65となり、14号墳の数値は墳長33mと小型の前方後円墳である21号墳に近い数字となる。また14号墳の前段階の首長墓である22号墳は、3号墳の相似形墳とされていることから、多少の誤差を含んでも0.78前後と14号墳とは大きく異なり、14号墳に後出する首長墓である5号墳



第 31 図 生目 14 号墳墳丘・周溝復元図 (S=1/400)

第3表 14号墳墳丘復元法量

墳丘長		63m
後円部径		39m
前方部長		24m
くびれ部幅		13m
前方部幅（復元）		19.5m
後円部高		4.5m
前方部高		1.8m
後円部と前方部の比高差		2.7m
段築	後円部	2 段
	前方部	2 段

大きいため、14号墳は別の企画により築造されたと想定される。

も1.04と14号墳とは大きく異なる。墳丘規模を考慮する必要もあるが、連続する首長墓でありながら、各代で墳形を大きく変化させたことが明らかである。14号墳は以前、柳沢一男により西殿塚類型とされ（柳沢1997）、その後の発掘調査成果を受け撤回されている（柳沢2011）。また有馬義人は西都原100号墳、173号墳とともに箸墓亜類型と位置付けている（有馬2006）。有馬が類型とした3墳を比較すると、14号墳は後円部2段築成であるのに対し、100号墳、173号墳は3段築成であり、後円部と前方部の比率も、100号墳0.75、173号墳0.70と開きが

## 第2節 生目14号墳の葺石・敷石について

各トレンチにおいて、墳丘斜面で葺石が比較的良好な状態で検出されるとともに、墳頂平坦面やテラス、後円部墳丘端周囲の一部では敷石が確認され、墳丘全面が礫によって被覆されていることが明らかになった。このように墳丘全面を礫によって被覆する構築方法は、生目3号墳、生目22号墳においても確認され、構築方法の継承が伺える。葺石材は砂岩を主体とする円礫を用いており、5号墳と同様に近接する大淀川から搬入されたものと推察される（宮崎市教委2010）。

14号墳は葺石、敷石の構築方法も特徴的である。墳丘基底部、1段目斜面の基底部という横方向の傾斜変換には、明確な区画列石を配するが、縦方向の区画に関しては、くびれ部や、後円部と前方部をつなぐスロープ部以外では明確な区画列石を配せず、「10cm程度の群」、「15cm程度の群」というように一定の範囲の石の大きさを揃えることで区画を造り出している。この区画を石の大きさに区別する方法は敷石にも採用されている。このように区画列石をほとんど用いないが、施工が決して粗雑なわけではなく、礫の配置は非常に丁寧であり、5cm程度の礫を使用する箇所では、竹串も通らないような密な施工も見られる。葺石の施工方法は、礫の小口面を墳丘斜面に突き刺して定着させており、葺石を正面から見ると、礫がやや上方を向いている。葺石を固定するための粘土等の補強材や裏込めの礫は検出されていない。裏込めを用いず、基底石を配置した後に、一定の角度で積み上げて行くこの施工方法は、縦方向の区画列石が希薄である点など若干の相違も見られるが、大系的には廣瀬覚氏による分類のC類に当たり、その出現は古墳時代前期中葉（集成編年3期）とされている（廣瀬2011）。

墳丘基底部周囲の敷石は、過去に生目5号墳の報告書内において、生目古墳群の他の前方後円墳とともに考察されている。その中で14号墳は墳丘周囲の敷石を有しないと報告されているが、本報告書では調査状況を整理する中で、後円部の一部に墳丘周囲の敷石を有するとの見解に至り報告した。ただし後円部の一部でのみ見られる不完全なものであり、5号墳の報告書の記載どおり、葺石、敷石の有り方から見ると、14号墳は3号墳、22号墳より退化傾向にあることは間違いない。また14号墳に後出する5号墳では、墳頂平坦面とテラス面の敷石も省略されている。他地域の調査事例も踏まえると、前期古墳では、中山大塚古墳の前方部墳頂平坦面や、玉手山1号墳の墳頂平坦面とテ

ラス面、玉手山3号墳、7号墳、9号墳のテラス面など、墳丘平坦面に敷石を施すものが確認されている。そのため古墳時代前期には、平坦面にも礫を敷設する古墳が一定程度存在することは明らかである。それが古墳時代中期に近づくにつれ、平坦面への礫の敷設が省略されていくことになるが、その省略の過程が生目古墳群内において表徴されている。

### 第3節 生目14号墳の位置付けについて

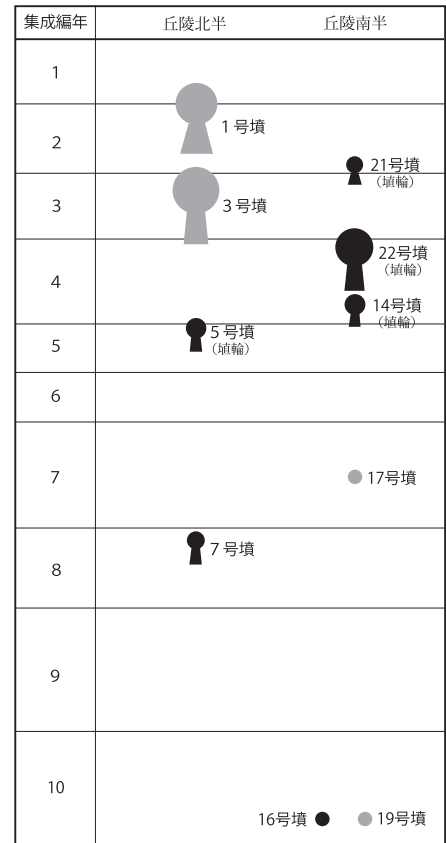
調査の結果、14号墳は出土した壺形埴輪から、集成編年4期末に位置付けられた。生目古墳群におけるこの時間的位置付けは、墳長101mの22号墳に後続し、墳長57mの5号墳に先行する位置に当たる。前段階の22号墳の規模と比較すると、2/3程度の規模であり、生目古墳群を築造した勢力の衰退を表していると考えられる。後続する5号墳はほぼ同規模であり、5号墳の後、集成編年8期の7号墳まで前方後円墳の築造が停止する。第32図を見ると、14号墳を始め、埴輪を有しているのは主に南半支群で、北半支群で有しているのは、5号墳のみである。時期が不明である23号墳に留意する必要があるが、現段階で5号墳は、生目古

墳群における連続した首長墓系譜の最後の古墳と考えられ、この段階によりやく北半支群でも埴輪を導入したと考えられる。ここから地形的な区分に加え、埴輪樹立の有無によっても、両支群を区分できる可能性がある。21号墳において少量の底部穿孔二重口縁壺を用いた祭祀に始まった南半支群の壺形埴輪の樹立は、22号墳で一定量の樹立を達成し、14号墳に引き継がれている。14号墳では調査範囲内において、墳頂平坦面の両肩に0.8m～1.7m程度の間隔をもって樹立されていたことが明らかになっており、後続する5号墳が丘陵下部方向にのみ樹立していたことを合わせると、22号墳とともに、生目古墳群において最も埴輪祭祀が盛行した古墳と言える。

生目14号墳は、縮小した墳丘規模から、生目古墳群を築造した勢力の衰退への過渡期にある古墳と位置付けられ、それと同時に、敷石帯の退化傾向が見られることから、前期的な古墳の築造方法から中期的な古墳の築造方法への転換期にある古墳と位置付けられる。

#### 【主要引用・参考文献】

- 有馬義人 2006「南九州における前期古墳編年の検討」『前期古墳の再検討』九州前方後円墳研究会。  
 沼澤 豊 2005「前方後円墳の墳丘規格に関する研究（上）」『考古学雑誌』第89巻第2号、日本考古学会。  
 廣瀬 覚 2011「1墳丘と外表施設の諸相⑥葺石と段築成」『墳墓構造と葬送祭祀』古墳時代の考古学3、同成社。  
 柳沢一男 1997「宮崎市内の古墳」『宮崎県前方後円墳集成』宮崎県史叢書、宮崎県。  
 柳沢一男 2011「南九州の出現期古墳」『邪馬台国時代の南九州と近畿』香芝市二上山博物館友の会「ふたかみ史遊会」。  
 宮崎市教育委員会 2010『生目古墳群Ⅰ』－生目5号墳発掘調査報告書－、宮崎市文化財調査報告書第80集。



は時期比定の根拠が弱いもの

第32図 生目古墳群主要古墳変遷図